

2020年5月24日

わたしたちの未来の姿

主の昇天の祭日です。『聖書と典礼』の冒頭に記された集会祈願には、この祭日が持つテーマが次のようにまとめられています。

「全能の神よ、あなたは御ひとり子イエスを苦しみと死を通して栄光に高め、新しい天と地を開いてくださいました。主の昇天に、わたしたちの未来の姿が示されています。」

主の昇天の出来事は、弟子たちとイエスさまとの「別れの時」であると同時に、新たな「出発の時」を示しています。さらに弟子たちと「わたしたちの未来の姿」をも示すという点で特別な意義をもつ祭日と言ってよいでしょう。長期化する自粛生活の中ですが、わたしたちはポスト・コロナウイルスの世界を思い《福音に根ざした未来》をどのように築いていくことができるか黙想することができます。

第一朗読「使徒たちの宣教」の中でイエスさまは、「苦難を受けた後、ご自分が生きていることを、数多くの証拠をもって使徒たちに示し、40日間にわたって彼らに現れ、神の国について」（使徒1・3）話されました。そして「彼らが見ているうちに天に上げられたが、雲に覆われて彼らの目から」（使徒1・9）見えなくなってしまう。11人の弟子たちの中にはイエスさまを信じることができずに「疑う者」（マタ28・17）もいたと福音書は伝えます。この疑う弟子たちの姿は、マタイ福音書の中では、14章22節以下にも見ることができます。それはガリラヤ湖上で逆風のため弟子たちの舟が苦境に陥る場面です。前にも後ろにも進むことができなくなった弟子たちの舟に、イエスさまは湖上を歩いて近づき、救出します。驚くべきことにイエスさまは、ペトロにも湖上を歩くように招いていますが、ペトロは強い恐れを感じ、水の中に沈みかけ「主よ、助けてください」と叫びます。すぐに「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」（マタ14・31）とイエスさまから救い出されています。

わたしたちも、新しいことに挑戦しようとするとき、湖上のペトロや、主の昇天の弟子たちと同じように、強い恐れや疑いを抱いてしまうことがあるかもしれ

ません。不安が先に立ち、危機的状況に翻弄《ほんろう》され、前に進めなくなります。しかし、そのような時こそイエスさまが「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」（マタ28・20）とわたしたちの歩みを支えておられることを忘れずにいたいと思います。キリストは「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にきなさい」（マタ28・18）とご自分の使命を弟子たちに託されました。キリストの弟子になるということはすべての人が「魂に安らぎを得られる」（マタ11・29私訳）という世界の到来を意味しています。

聖パウロが述べるように「あなたがたに知恵と啓示との霊を与え、神を深く知ることができるようにし、心の目を開いてくださるように。そして、神の招きによってどのような希望が与えられているか、聖なる者たちの受け継ぐものがどれほど豊かな栄光に輝いているか悟らせてくださるように」（エフェソ1・17-18）という勧めに従い、見えるものではなく見えないものに目を注ぎ、すべての人がその魂に安らぎを見いだす世界が訪れますように。

「わたしは世の終わりまで、
いつもあなたがたとともにいる。アレルヤ。」
(マタ28・20)

カトリック立川教会 主任司祭
東京教区 ヨゼフ 門間 直輝